



一日目追加 HO
マリー





朝日とともに目が覚めた。

ぼんやりとする頭で、見慣れない景色を見つめる。

——そうだ、今は小屋にいるんだった。

生まれてからずっと教会で過ごしていたから、山道を歩いたことで相当疲れていたようだ。

持ってきた寝衣^{しんい}に着替えることなく横になってしまった。

ワンピースも、侍女に結ってもらった髪もぐちゃぐちゃだ。

侍女や先生にこんな姿を見られたら怒られてしまう。

けれども、今、私を叱る人はここにいない。

この小屋は、何人もの子どもが魔法を授かるために過ごした場所だ。

肩の痣^{あざ}は魔力の源。

儀式でそれを解放し体内に巡らせることで、魔女になる。

そのためには、あらかじめ魔力を体になじませる必要があった。

この小屋の周りにはたくさんの魔力が漂っていて、ここで過ごせばそれが叶うのだという。

今までたくさんの人に囲まれて過ごしてきたから、部屋に小鳥の声が響くほどの静寂が少し寂しい。

けれども、この小屋にいるのは私だけじゃない。

彼——スミレはもう、起きているだろうか。

ご飯は食べただろうか。

料理の知識はあるけれど、作るのははじめてだった。

切った野菜は不揃いで、味だって保証できない。





それでも、ご飯は体づくりの基本だから食べてほしかった。
体は拭けただろうか。

けがをしている箇所を清潔にしてもらわなければならない。
あとの処置は実際にけがの具合を見なければわからないから、私にできることはこのぐらいだった。

こうして誰かのことを心配するのははじめてで、不謹慎だけれど、なんだか新鮮だ。
魔女になれば、こうやって人助けをすることになるのだろうか。

しかし、誰もいないはずの小屋に人がいるとは思いつかなかった。

昨日、とっさに『ここに住んでいる』と答えてしまったけれど、もしも詳しいことを聞かれたらどうしよう。

魔法を扱う者はおそれられる存在だ。

それに関連する話をするのはやめたほうがいいだろう。

私はまだ魔女ではないけど、けがをしている人を^{おび}怯えさせるわけにはいかない。



とにかく、なにかを尋ねられたら『ここは家の所有する建物で管理のために住みはじめた』というウソで乗り切ろう。

この小屋が教会の管理下にあるのは間違いないし、うん、我ながらいい案だ。

下へおり、井戸で汲んだ水を鍋に入れ、火にかけた。

沸くのを待っている間に外へ出て少しだけ歩くと、小屋の裏に小さな花が咲いていた。





たしか、食器とともに花瓶があったはずだ。
それを丁寧に摘んで、小屋へ戻った。

花瓶に花を飾り終えたあと、お湯で体を拭いた。

ぐちゃぐちゃの髪も解^{ほど}いてから洗い、いつもは侍女が結ってくれていた髪を自分で結ぶ。

簡単なふたつ結びしかできないけれど結ばないよりはいいだろう。

最後に服のしわを伸ばした。

今日は山の麓^{ふもと}にある町へ買い物に行かなければ。

一人分の食料しか持ってきていないし、スマレが欲しいものや必要なものもあるかもしれない。

声をかけ、尋ねてみよう。

準備ができたので、彼のいる部屋の前に立つ。

昨晚置いたお湯もトレーもなくなっていて、ひとまず安堵した。

私はノックをするために、手を挙げた。

